



自作の製本道具の前に、児童に作業を説明する西さん  
(香美市内の小学校で)

「本」に新たな  
「命」吹き込み

**休**み時間になると児童が自由に出入りする、にぎやかな図書室。図鑑など大判の本を担当する西一夫（64歳・赤岡分教会長・高知県香南市）は、自作の製本道具、丈夫な畳糸、製本用クロスなどを器用に使い分けながら、破損した本や落丁したページを丁寧に修復していく。

県東部を管轄する香美支部では、20年以上続く活動として月1回、支部内の小学校で図書修理に当たっている。

きっかけは25年前、一夫の妻・富恵が、わが子の小学校入学を機に、校内の本を持ち帰り、修理を始めたことにある。

数年後には、富恵が「子供たちに作業を見てもらい、物を大切にする心を伝えたい」と学校側に提案し、図書室で活動するように。それを聞いた支部の教友たちの協力を得て、現在のひのきしん活動につながった。

一夫が活動の輪に加わったのも、ちょうどこのころ。夫婦で「ひのきしんスクール」を受講し、地元の教友に手ほどきをする一方で、活動の場を増やそうと、地域の学校へ働きかけた。

これまでひのきしんに赴いた学校は10以上。8年前からは、地域の更生保護女性会が参加を申し出るなど、図書修理の輪、は徐々に広がった。

「妻が一人で始めたころは傍観しているだけだったが、続けるうちに、物の大切さを伝える活動の重要性を、ひしひしと感じた」。以来、より良い修理方法を学んで試したり、生来器用な手先を生かして、製本道具を自作したりするようになった。

平成21年6月、また新たに小学校への訪問が決まった矢先のこと。誰よりも訪問を楽しみにしていた富恵が、突然の交通事故で帰らぬ人となった。

悲しみに暮れる一夫は「とても作業に出られる心境ではなかった」。しかし、妻と共に活動を支えてきた支部の婦人たちの力強い声に心が動いた。

「奥さんのためにも、続けましょう！」



「何してるの？」

作業中、児童が近寄ってくると、一夫はいったん手を止め、道具を手に説明する。なかには「これも直して！」と本を持参したり、「お手伝いしたい！」と申し出る子も。

作業台には、使い込まれた道具と一緒に、在りし日の妻の写真を納めたフレームを置くようにしている。

「妻は『物は大切にしなされや』との教祖の教えを、一人でも多くの子供たちに伝えようとしていた。その志は、いつまでも持ち続けようと思う」

フレームの中の笑顔が、一段とまぶしく見えた。